

# うたと共に

——日蘭の狭間にて——

## モーレンカンフゆこ

小説を書くより小説を生きなむと波に揺られて超えし海  
はも

国を出でし時止まってしまった我が時計巻いても巻いて  
も二十二歳

私は学者ではありませんので、詩や詩人についてはあまり勉強していません。ただひとつ、私にとつて詩とは何かを、母国語としての日本語がいかに私と裡なる私を繋げてくれたかを、そして詩が私の人生をどう導いてくれたかを、語ってみたいと思います。ここでは自由詩には触れず、主に朝日歌壇俳壇入選作の中から選びました。朝日が唯一の投稿先です。

## 一 歌文集『たんぽぽのうた』

愛知県立女子大学英文科を一九六六年卒業後、アメリカに。船で二週間かかって太平洋を渡る、そんな時代でした。

アメリカのアイオワ大学創作プログラムで「小説の形」というのを学ぶことになり、そこで客員として招かれていた田村隆一先生と初めてお会いしました。先生の『四千の日と夜』を夕日の図書館で読み、まるで麻酔を注入されたように放心した時のことを今懐かしく思い出しています。先生との「詩のレッスン」と称しての楽しい日々、心にとめた先生のお言葉の数々。その中に後々私を救ってくれた一言がありました。それは私がオランダで結婚し、田舎

で二児を育てていた時のことです。ホームシックと異国語の孤独感の中で、四十歳になる寸前、ついに心身ともにボロボロになってしまいました。

我老いて開ける格子戸「ただいま」と呼べど叫べど答えなき夢

異国まで躓きこし影は国の陽を恋いて泣き泣き我に従う  
その時思い出したのが先生のお言葉でした。「若い時は誰でも詩人だ、四十になっても詩を書いているのは本当の詩人だ」と。結婚前までは英詩を書いていたのでありますが、すっかり遠のいていました。四十歳になって決心、初めて短歌を作り朝日歌壇に投稿しました。

ひっそりと君の異国の子守歌ゆれし背中にゆれし夕焼け  
窗口で法律用語を調べつつ日本国籍破棄を告げけり

子らもまた命短きたんぼを摘みては創る故郷の春

入選というのは本当にうれしいものですねえ。毎日書きました。毎週入選しました。家族のだれにも読めない日本

語で書くことは初め悲しかったのですが、世界中どこにいっても私は私だと開き直ったのでしょうか。それから心身共に元気になりました。あの匂いたつような健康感は忘れられませんが。

それ以来、喜怒哀楽を全部吐き出しました。生への賛歌も、祖国への愛憎も、愛も恐れも回りのドラマも。

祖国捨てし罪の意識をひたすらに「愛」と名づけて淋しきものを

ああ白夜腕に額伏し国恋えど日本が良きと思うにあらざ  
朝日歌壇は四者選で一度にたくさんの先生方に見て頂けます。当時宮柵二先生、前川佐美雄先生、近藤芳美先生、馬場あき子先生、島田修二先生、佐佐木幸綱先生、全員が励ましてくださいました。特に近藤先生は拙い歌の将来を見てくださっていたのでしよう、賞までくださいました。

春来れば解放記念日四十年語り継ぐべく吹雪に集う

(一九八五年度歌壇賞 近藤選)

解放祭前夜野原の線路の脇に国旗下げ黙禱する一団のあり

入選が続いだした頃、母が死にました。母は二度オランダまで来てくれて、孫の顔も見えて安心して帰っていったのがせめてものなぐさめでした。

我と娘で逝きにし母のつるあやめ折りて結ばん千代紙の夢

(オマニオランダ語で「おばあさん」)

娘に歌う別れし国の子守唄ねんねんやまぢ安らかに母よ

一年後、献体した母の遺骨をとり、初めて家族をつれて帰国しました。

東京駅急行列車に落ち着けば膝にコトコト母の骨なる

竹トンボ無心に飛びぬ妙心寺夏の陽積もる法堂の屋根に

「故郷」と夢に見たるは道ひとつ槇のかきねのかすかなうねり

この時お会いしたNHKの伊藤豊英氏と、劇作家須藤出穂氏が後々ラジオドラマ「止まってしまった時計、モーションカンブふゆこのうた」を作ってくださいました。私の心の深部を三田和代さんが美しい声で朗読。私に直接語り掛

けてくれるこのドラマの中で、中村伸郎氏のセリフに泣きました。「しつかりものは歌なんか作らない」と。そして鈴木瑞穂氏が心を籠めて語りかけてくれるのです。「あなたは詩人です」と。

それで私の詩人の定義が決まりました。詩を書くことによって生きていける、詩を書くことによって人生がどんどん展開していく、それが詩人であると。

このドラマが放送された直後、白鳳社が歌文集「たんぽぼのうた」を五千部出版してくださいました。

たんぽぼの黄金の海に身を投げて空を抱けば命いとおし

黒人の友だちもでき息子らの混血部隊寒風をゆく

ひっそりとまた死にゆくは何ならむ春の嵐に耐えていたれば



若き日の恋は歳経て酔となるやワインとなるやと若者の言う

歌壇に現れる自分のペンネームを見て、まるで私が志を果たして故郷に帰っていったように思えました。日本語と日本の伝統詩と、詩を愛する日本という国に。

思い切り日本語忘れその後で静かに還れよと遥かなる師は不思議なる泉をもてり汲むほどに湧き溢れくる日本のうた  
机きの砦き遙か故国の言葉もてかそけきものを守り居るかな  
羊鳴く野辺に送られ身は散れど還れ我が歌国の心に

## 二 歌集『定本還れ我がうた』

この歌文集は『たんぽぽのうた』の抜粋と、その後の歌を集めた『雪あかり』をまとめたものです。

『たんぽぽのうた』が出て夢が実りました。めでたしめでたしで終わると思ったのですが、本を一冊書いてしまうと、自分が変わってしまうのですね。子供たちの巣立ちと

同時に離婚しました。一人壁に向かつて書き綴った歌やエッセイを集めたのが『雪あかり』です。

帳たばおろし心に灯す雪あかり雪の原野に誰たが足跡ぞ

思慕という少女の病癒えずして疼けば哀し白夜の宵は

我が敵は砂漠の地平に現わるる絶望という蜃気楼なり

壁に向かい己に向かった日々でした。不思議なことが起こり始めました。まるでペンが一步先に走っていくように、書いたことが実現していくのです。何か問えばふつと開いた本の一行に答えがある、小さな日々の奇跡が起こる度に、頭を垂れて「うわー」と心の中で叫んだものでした。

今ではそれが「シンクロニシティ」と呼ばれるごく普通の現象なのだと思ったのですが、このことについては、愛知県立大学同窓会主催の講演に「事実は小説より奇なり——シンクロニシティの不思議な世界と日本伝統詩歌」という題で話ささせていただきました。

正夢も見ました。不思議な夢でした。ギリシャのデルファイまでそれを確かめにいきました。そのことについてのエッセイは歌集の中に詳しく書きました。そこでデルファイ

のある詩人の家に寄り、一冊の本をばらばら見ていたときにずっと目についた一節がありました。「詩の根源は神聖な直観である。詩人は予言者でもある。詩人は『視える人』であり、同時に秘儀の解明者でもある」と。これはまたなんと厳しい詩人の定義でありましょうか。

己の喜怒哀楽を抒情詩に託しているうちに、測り得ない宇宙の不思議に心が向いてはいきましたが、未だ「秘儀の解明者」などと程遠いことです。

この時期には何度も帰国しました。望郷の歌は悲愴さを振り落として、だんだんと昇華していったように思います。

ほこほこと南瓜の黄の裡に燃ゆる望郷ひとつ鎮めかねつつ

桑の実もありてうれしき祖国かな桑の実を子らに何と語らむ

茶畑の丘を貫き雲に入るこの一本の道を恋いにき

六年近く独りで暮らしました。『カスタニエ』（マロニエ）という小誌を百冊ほど刷って、好きな詩歌や自分の近況などを発信していました。日本語教師としてねずみのように学校から学校を掛け持ちして。アムステルダム日本人学校

補習校、ビジネススクール、異文化研究所など、最後はオランダ文化教育学術省の「日本研究プログラム」で、全国から選ばれた新卒の大学院生をライデン大学内で特訓にあたりました。無我夢中でした。

そんな時朝日新聞から記者の方と写真家が一週間ほどアムステルダムまでインタビュウに来てくれました。インタビュウのことなどすっかり忘れて、日本からのお客様を案内してまわった楽しい日々でした。インタビュウは二〇〇二年「私たちの地球物語」として日曜版の二ページにわたって掲載されました。

そして五十九歳で良き人に巡り会い再婚。詩が結んでくれたご縁です。

マロニエの天に爆ぜ咲くこの街の君のすみ家に移りて来たり

白夜揺れうすむらさきのリラが揺れ心も揺れて老に入るらし

このめでたしめでたしの歌集を閉じるにあたって、いさましい歌が並びます。

人の非が見えざるようにと大いなる計らいなるか目の衰

えは

空に星机上に熱き国言葉ふりかえるまじ暗き渚を

本箱に置き忘れたる夢ひとつ塵をはらいて生きてゆかなむ

町中の運河にかかる橋あまた橋をわたりて生きてゆくべし

### 三 句集『定本風鈴白夜』とその後

タイトルは小沢信男氏がつけてくださいました。短歌がだんだん短くなつて俳句になった、とどこかで言つたように記憶していますが、どうやら思い違ひだつたようで、調べてみたら俳句は短歌と同時進行でした。朝日俳壇初入選が一九八六年、加藤楸邨選で、歌壇賞を頂いた年でした。

一九九二年度朝日俳壇賞を金子兜太先生がくださいました。それでうれしくて俳句をたくさん作りました。



雪の降る異国に菩薩の絵はがきよ

自由愛す熟れし葡萄の木の下に

(一九九二年度朝日俳壇賞、金子選)

私の俳句は抒情的で、短歌の短くなつたような感じで、多分季語を核にするオーソドックスな句流からは外れていたことでしょう。でも金子兜太氏は私の句の抒情性を伸ばしてくださいました、入選と評という数少ない交流の中で。

雪になりてとめどなく泪落つ

(ふゆこ氏の句は、日常身辺のことに繊細鋭敏に反応して止まない琴線の旋律をそのまま書きとつたもので、歌うがごとくにみえて、最短定型の恩寵ともども引き締まった印象。金子兜太評)

冷まじや打ち首にせし恋心

(モーレンキャンプ氏の句は、古風に見えてしからず。逆に新鮮な切れ味に引かれて、いかにも俳句らしいと思う。恋心を打ち首にしたとは凄まじいが、季語「冷まじ」は、より深く内面の悲愴を伝えてくれる。金子兜太評)

というわけです。つたない句のなかに、ぴかりと光る一品が  
ときどきぽこんと現れるようになりました。

寒灯下曲がってしまった曲がり角

手の中に団栗だんくりという故国あり

双六作らむアレキサンダー遠征などと

ごきぶりを打ちて祖国を出でにけり

あまたなる橋を渡りて夏果てぬ

腹の中で手を振る孫よ天高し

駆けこみ寺の客も主も息白しあはれ

どこまでが日本人身の内の霧

金髪きんぱつの友の土葬やすみれ投ぐ

忘れえぬ忘れな草の青さかな

俳句はとても難しいのですが、詩的なスリルがありました。勉強の方法はただ一つ、かつて田村隆一先生の一言を  
実行しただけです。「骨董屋が弟子を教えるときどうするか知  
っているかい。初めから本物だけを見せる。すると偽物が現  
れたらすぐわかるんだ。本物と偽物を同時に見せていると、  
本物が現れたときわからない。」

日本の俳句事情から切り離されて師もなく朝日俳壇入選  
だけを頼りに手探りだった私は、一冊の歳時記（水原秋櫻  
子編）と数冊の秀歌のアンソロジーだけを読みました。そ  
れで本歌取りなんていう楽しい遊びもできました。人のふ  
んどしで相撲とるようなものです。

黒鉄くろがねの風鈴ふうりん白夜を鳴り止まず

（黒鉄の秋の風鈴鳴りにけり 蛇笏）

山河恋うて国を恐るる余寒かな

（世を恋うて人を恐るる余寒かな 鬼城）

寒夕焼け滅びし国の数知れず

（霜夜聞く滅びし国の子守唄 朱鳥）

そのうちに名句への返事なんか始まります。あるいは自  
分の句に答えてくれる句を見つけて、「参った！」とさけ

んだり。

雛もあり娘もありて子規悲し

(雛あらば娘あらばと思いきり 子規)

鳥渡る靴もコートも脱がず居て

(一瞬の決意北へと鳥渡る 山瀬成子)

ただ私には人様の句の鑑賞力がありません。季語の膨大な背景や俳人の生きざまなど、無知であるということとは致命的です。従ってたいいての秀句も背景を知らないために退屈に思えます。たとえ知っていても英訳する場合これが一番のネックです。英詩としてなんてことはない句に長い注を付けてみても、読者にパンチをくわすほどのインパクトは無理なのです。

それで自分の限界を知り、ただただ良き句を志すしかありません。二〇一三年度朝日俳壇賞と、続いて二〇一四年度俳壇賞は、そんな私を励ましてくれました。

オランダの光の中を秋がゆく

(朝日俳壇賞 長谷川權選)

大戦と大戦の間の日向ぼこ

(朝日俳壇賞 大串章選)

句集には一人旅や結婚後二人で訪れた国々の旅日記が収めてあります。正夢のギリシヤ、イタリア一周、ポルトガルのマデラ島、友人を訪ねてバリ島、エジプトの砂漠を横切つてナイル川を渡り王の谷、フランスの有機農業をしている夫の娘を訪ねて向日葵と葡萄の丘を駆け、イタリアのエルバ島から癌の友人を連れて帰ったり。久々のバリ、スペインのアンダルシア、日向ぼこをしたテネリフ島、カナリア島、スイス、ドイツのハイキング、オーストリア、ハンガリーの友人を訪ねる旅。息子の結婚式とその後孫を抱きにニューヨークに。ニューヨークの国連に勤めた若き日の思い出の街角を孫を抱いて。

そうそうアメリカのアイオワ大学からお招きを受けて昨年五十一年ぶりにあの図書館を訪れたことも。離婚後の苦悩の日々に奇跡が起こり始めて以来、なんとという幸せな結末となったことでしょう。



南仏のマロンジャム赤子の生まれしと (南仏)

麦帽子かぶつて君の妻となる (南仏向日葵の丘)

地の裂け目より湧き出でて金の蝶（バリ島）

いと思うのです。

鷺飛ぶや光と陰の谷深く（ギリシヤ　オリープの谷）

らふそくの居間もくれんの灯る天

青葡萄険しき島の天辺に（ポルトガル、マデラ島）

雪降らず天にも天の事始

世界遺産の修道院で日向ぼこ（スペイン、アンダルシア）

地獄絵の横爛漫の金屏風

春陽やあの水平線を超えてきた（イタリア、エルバ島）

どこでどう繋がる我と赤とんぼ

竹とんぼ飛ばしたことも母の国（京都、妙心寺）

また一人消して木枯らし去り行けり

幸あれと囁けばあふるる泪かな

（ニューヨーク　孫を抱いて）

長い、そしてあつという間の一生でした。毎日七十六歳

と自分にいいきかせているのですが、どうしても信じられ

ません。日本を出てから五十四年が過ぎてしまいました。

初孫の青き瞳にぼたん雪（ヘーグ、オランダ）

朝日俳壇選者の加藤楸邨先生、川崎展宏先生、金子兜太

国出でて我も雛も老いにけり

先生、長谷川權先生、大串章先生、高山れおな先生が励ま

海超えて二人寄り添うだいらびな

してくださいました。

今は俳句でシンクロニシティの世界を掴むことができます

長らへて雛と守らん国の詩歌

うた

\*\*\*

以上、書いているうちにどんどん長くなりました。最後まで読んでくださったら、うれしいです。歌集も句集も年代順に詞書もなく何百も並んでいると、読むのが苦痛なので、私は歌集も句集も製作の日付けをバラバラにして、一つのお話を作りました。小説を書きたいと思っていた私のせめてものチャレンジです。ハッピーエンドじゃないと困るのです。

短い日本の詩。作者が半分囁けば、読者が半分その余白を埋める、作者と読者の合作としての詩。なんとかそのすばらしい詩の在り方を説明しようとして、「うたと共に」のシリーズを始めたわけです。外国で一人相撲をしている私にとって、読者は自分自身、こうして自句自解の妙な代物になりました。一首、一句でも心に残るものがありましたら幸いです。どこか私の知らない所で、ひっそりと寄り添ってくださるソールメートが見つかりますように。

#### 〔著者紹介〕

モーレンカンフふゆこ（本名・富田冬子）さんは、一九四三年、東京に生まれる。岐阜県に疎開し、愛知県一宮市に育つ。

一九六六年、愛知県立女子大学文学部英文学科卒業。その年、単身渡米し、ジョージタウン大学夏季英語講座、国務省外国語学校日本語トレーナーを経て、アイオワ大学創作科に学ぶ。ニューヨーク国連本部に勤務の後、オランダに移住。アムステルダム日本人学校補習校教師として二十三年間勤める。また、オランダ文化教育学会「日本研究プログラム」教師としてライデン大学にも勤務する。

一九八四年、朝日歌壇（朝日新聞）に投稿を始め、その後朝日俳壇にも投稿する。朝日歌壇賞・俳壇賞受賞多数。個人誌『カスタニエ』を創刊（一九九四年）

二〇一一年、愛知県立大学において、「事実は小説より奇なり」と題して講演を行い、好評を博す（同窓会主催）。その後、オランダにおいても度々講演をし、二〇一九年には、アイオワ大学の招聘を受け「Life in Poetry」と題して講演する。

#### 〔著書〕

歌文集『たんぼのうた・遙かなる故国へ』（白鳳社 一九八七年）、歌集『定本連れ我がうた』（冬花社 二〇一一年）、句文集『定本風鈴白夜』（冬花社 二〇二二年）、詩歌写真集『うたと共に』俳句編・短歌編・自由誌編（自刊 二〇一六年）など。詩歌写真集英語版カラー『Love』[Snowflakes]『Age of Longing』（作成中）現在『句文集オランダの光』を作成中。